観音菩薩の居所 “Potalaka” の漢訳とその変遷

駒澤大学仏教文学研究所　陳怡安

はじめに

観音聖地の名前は数多く存在した。例えば、『六十華厳』の「光明山」、『羅摩伽経』の「金剛輪荘厳高顕〔山〕」（または「金剛輪山」）、『八十華厳』の「補怛落迦山」、そして「宝陀山」、「普陀山」がある。その後、中国の僧侶らの解釈により『華厳経』のPotalakaは、中国の普陀山を指すようになった。普陀山という観音聖地が中国にできたのは、玄奘（602-664）の『大唐西域記』と関係があると考えられている[1]。しかし、これまでPotalakaの意味については、明らかにされておらず、定説もない。

上記の普陀山に加え、観音聖地を形容する言葉として、「海岸孤絶処」という単語も存在する。「海岸孤絶処」については、先行研究でしばしば言及されているものの、その由来や受容の歴史は十分に明らかにされていない。また、「海岸孤絶」という名称は、徳山志先禅師の禅語録[2]や黄庭堅の詩[3]などの典拠となり、曹洞宗の真歇清了禅師の庵の「海岸孤絶禅林」[4]（或いは「海岸孤絶処」[5]）という扁額にも用いられた。さらに、現在、中国の普陀山の最南端に「海岸孤絶処」と刻まれた石碑がある。

Potalakaから中国の「普陀山」への変遷を明らかにするためには、Potalakaの翻訳（「補陀」、「宝陀」、「普陀」など）の変遷に加え、観音聖地を形容する

1　小林太市郎［1974］『唐代芸術の研究』、p.30、淡交社。

2　『新纂続蔵』78、p.540b19-21。

3　『黄庭堅全集』第 2 巻、p.571、2001年。中国の文献を入手するにあたっては、浙江師範大学の譚勤先生に多大な尽力をいただいた。ここに感謝申し上げる。

4　T51、p.1137c23-25。

5　『中国仏寺史志彙刊』9 、pp. 103a08-104a4。

言葉である「海岸孤絶処」についても考察する必要がある。本節では観音聖地の地名の変遷や受容の歴史を解明する。

1．Potalakaに関する問題の所在と先行研究

Potalakaは『六十華厳』では「光明山」となっており、似たような山名として「菩薩住所品」の「樹提光明山」がある。以下に、『羅摩伽経』、『八十華厳』、*Gaṇḍavyūhasūtra*、*Sdong po bkod pa'i mdo pa*と対応する箇所を表にして示す。

表1　『華厳経』諸訳における「光明山」の表現

	『六十華厳』	『羅摩伽経』	『八十華厳』	梵本	蔵本
「入法界品」のPotalaka	光明山[6]	金剛輪荘厳高顕[7]、金剛輪山[8]	補怛洛迦[9]	Potalaka[10]	ri gru 'dzin[11]
「菩薩住所品」の光明山	樹提光明山[12]	（欠）	光明山[13]	（欠）	ri 'od [14]

表1から、「光明山」は『八十華厳』「諸菩薩住処品」に見られるものの、では“ri 'od ces bya ba”[15]（光明という名の山）となっている。しかし、*Sdong po bkod pa'i mdo pa*ではPotalakaに対応する箇所は“ri gru 'dzin”となっている。また、同表から、『六十華厳』ではPotalakaの音訳はまだ使われていないことがわかる。以上のことから、現存のサンスクリットテキストから「光明山」の原語を考察することは困難である。

Potalakaが初めて音訳されたのは闍那崛多訳『不空羂索呪経』（587年訳出）

---

[6] T9、p.718a15。

[7] T10、p.859c10-11。

[8] T10、p.861a10。

[9] T10、p.366c3。

[10] P. L. Vaidya, ed. 1960. *Gaṇḍavyūhasūtra*, Buddhist Sanskrit Texts, No.5, p.159, line 6, Darbhanga.

[11] cf. P phal chen Si 245b6.

[12] T9、p.590a9。

[13] T10、p.241b29。

[14] cf. P phal chen Li 276a4.

[15] cf. P phal chen Li 276a4.

であり、その訳は「逋多羅山」である。法蔵もこの「逋多羅山」という訳を用い、「又『十一面経』在此山説」[16]と言った。問題は、耶舎崛多訳『十一面観世音神呪経』（561-577年訳出）には「逋多羅山」のような訳が見られないことである。また、法蔵の師匠である智儼の著作にもPotalakaの音訳は見られない。法蔵は、闍那崛多訳『不空羂索呪経』の「逋多羅山」という訳に依っていたと考えられる。

闍那崛多訳『不空羂索呪経』の次にPotalakaを使ったのは玄奘である。玄奘は『大唐西域記』において、「秣剌耶山東有布呾洛迦山。山徑危険、巖谷敧傾。山頂有池、其水澄鏡、流出大河、周流繞山二十匝、入南海。池側有石天宮、観自在菩薩往来遊舎。（秣剌耶山の東には布呾洛迦山がある。その山の径は危険であり、山と谷は傾斜して険しい。山頂には池があり、その水は鏡のように澄んでいる。〔その池より〕大河が流出し、山を二十周周流して、南海に入る。池の側には石天宮があり、そこに観自在菩薩が往来しやって来てとどまる。）」[17]と述べている。

宋の賛寧『宋高僧伝』は、秣剌耶山の「秣剌耶」の異訳である「摩頼耶」に対して、「釈跋日羅菩提、華言金剛智。南印度摩頼耶国人也、華言光明。其国境近観音宮殿補陀落伽山。（釈跋日羅菩提、中国語では金剛智という。南印度摩頼耶国の人である。中国語では光明という。その国境は観音宮殿補陀落伽山に近い。）」[18]と述べている。つまり、賛寧の『宋高僧伝』によると、南印度の摩頼耶国の「摩頼耶」は「光明」の訳である。従って、『大唐西域記』の「秣剌耶山」（摩頼耶）も「光明」を意味するため、『六十華厳』の「光明山」と合致する。

次に、『羅摩伽経』に「金剛輪荘厳高顕」とあるが、『六十華厳』では金剛輪山は鉄囲山を意味する。なお、長谷岡［2020］では、Potalakaは光明山、山、狐山、金剛輪山と解釈されている[19]。しかし、「狐山」は誤りで、正しくは「孤山」または「孤絶山」[20]である。

---

[16] T35、p.471c6- 7 。

[17] T51、p.932a14-17。

[18] T50、p.711b6- 8 。

[19] 長谷岡［2020］、p.828。

[20] T10、859頁、c10-11。また、金蔵でも「孤絶山」となっている（『中華大蔵経』第13冊、p.838）。

Potalakaの異訳であるチベット語の“ri gru ‘dzin”に関しては、H. a. Jäschkeの*Tibetan-English Dictionary*において、potaはship、laはto receiveと解釈されている[21]。

彦坂周［1989］は、“Potiyil”がサンスクリットの“bodhi”とタミル語の“il”（家・場所）に由来することを理由として、Potalakaは現在のインドのPotiyil山であると主張した[22]。Potalakaの位置に関する彦坂［1989］の指摘は重要ではあるが、具体的な位置については本論文では論じない。しかし、筆者は彦坂の説に対し、以下の2点の問題を指摘したい。

第一に、彦坂はPotiyil山の環境は、『華厳経』の観音菩薩の居所の記述と酷似していると述べている。しかし、玄奘『大唐西域記』には、観音菩薩の聖地はPotalakaだけではなく、例えばインドの迦布徳迦伽藍の南（摩揭陀国のあたり）にも観音菩薩の像があると記されている。そのため、Potiyil山がPotalakaであるか否かを判断することは難しいと言える。

第二に、彦坂は、「最後に山名PotiyilとPotalakaの関係について一言すれば、南印の聖山Potiyilの高名は華厳経編纂者にも伝わり、その場合タミル名Potiyilは意訳されてBodhi+loka或はBuddha+lokaのPrakrit形でPotalakaとなって北インドに伝わったのではないかと考える」と述べている[23]。しかし、彦坂の説には文献での裏付けがないという点で議論の余地が残っている。本論文の主旨から外れるため、彦坂の解釈に関する妥当性の検討は本論文では扱わないが、代替となりうる新たな解釈、Potalakaの漢訳の観点から論じる。

Marcus Bingenheimer［2006］によると、「小白華」の由来は、Potalakaのパーリ語である“pautalaka”とPauṇḍarīka（白蓮花）が類似しているため使われるようになったであろうと指摘している[24]。Potalakaのパーリ語は“pautalaka”なのか、そしてpauṇḍarīka（白蓮花）と類似しているか否かは今後再考する必要がある。

以上はPotalakaに関する問題の所在と先行研究の紹介である。次に、中国の注釈書におけるPotalakaについて見ていきたい。

---

[21] H. a. Jäschke *Tibetan-English Dictionary*, p.325.

[22] 彦坂［1989］、p.373。

[23] 彦坂［1989］、p.373。

[24] Marcus Bingenheimer［2006］, p.196.

2. Potalakaの漢訳である「補陀」、「宝陀」、「普陀」の地名について

陳怡安［2022］では、次のことを明らかにした。法蔵がPotalakaを「小樹蔓荘厳山」と解釈し、法蔵の弟子である慧苑がPotalakaを「小花樹山」と翻訳した。さらに、李通玄は慧苑が訳した「小花樹山」を参考にしPotalakaを「小白華」と翻訳したが、この「小白華」が後代に大きな影響を及ぼしており、中国の地名、韓国の仏書にも使われている。

上記に加えて、本論文では、Potalakaの音訳についても着目している。Potalakaの音訳には、「逋多羅」、「補陀」、「宝陀」、「普陀」などが存在していた。「補陀」、「宝陀」、「普陀」について、先行研究でしばしば言及されているものの、その由来や受容の歴史は未だに明らかにされていない。ここから、「補陀」、「宝陀」、「普陀」を中心に、その受容の歴史と意義を述べたい。

唐代から、『八十華厳』を含め、Potalakaは「補怛洛迦」という音写語で用いられていた。さらに、唐代の『陀羅尼集経』などの経典では「補陀落」になっており、この「補陀落」という訳語も日本に流伝し、現在でも広く用いられている。宋代では「補怛」、「補陀」に加えて「宝陀」が使われるようになった。これは神宗が元豊 3 年（1080）頃、現在の普陀山に「宝陀観音寺」の扁額を賜ったことに端を発する。

しかし、元代の盛熙明『補陀洛迦山伝』は、「補陀」という音訳を使用し、『補陀洛迦山伝』全書には「宝陀」と「普陀」が見られない。

明の万暦帝も「宝陀山」を重視し、万暦27年（1599）に皇太后の命を受け、宝陀禅寺に『続入蔵経』を賜り、そして、万暦33年（1605）に「護国永寿普陀禅寺」の扁額を普陀山に賜った。明の万暦帝が「宝陀禅寺」を「普陀禅寺」に改名した理由は不明である。

しかし、明の万暦帝の「御製重建普陀寺碑」では、「普照十方」[25]と「普度法門」[26]などの句が用いられている。そのため、明の万暦帝は、観音菩薩があまねく十方を照らし（「普照十方」）、そしてあまねく〔衆生を〕済度する法門を有する（「普度法門」）、という観音菩薩観を持つため、「宝陀」を「普陀」に変更させたのではないかと推測できる。

[25]『中国仏寺史志彙刊』9 、pp.56a6-57a1。

[26]『中国仏寺史志彙刊』9 、p.57a6。

筆者は、「補陀」、「宝陀」、「普陀」などそれぞれの音訳語は、成立時代を反映していると考えている。例えば、「補陀」は唐代から成立され、「宝陀」は宋の前後に多く用いられ、「普陀」は主に明の万暦33年（1605）から多く使用されるようになった。「普陀」という語の出現について、民国時代の王亨彦『普陀洛迦新志』では、次のように記されている。

> 按：三十三年始改宝陀寺額為「普陀」。二十七年二勅文、舊志均曰「普陀寺」。何可額尚未改、而先呼後易之名乎。特為改正、以示不妄。[27]
>
> 注釈：三十三年に宝陀寺の〔扁〕額を「普陀」に初めて直した。二十七年の二つの勅書では、舊志ではともに「普陀寺」と表記されていた。なぜ〔扁〕額がまだ直されていないにもかかわらず、先〔に成立したこの文献で〕後に直した〔普陀という〕名を呼んでいたのか。そのために特別に〔ここにおいて〕直して正し、嘘偽りないことを示す。

つまり、王亨彦は、明の万暦帝が万暦33年（1605）に「護国永寿普陀禅寺」という扁額を普陀山に賜ったという記述に依拠し、周応賓『重修普陀山志』に記されている万暦二十七年の二つの勅書が改定後の表記である「普陀」になっている矛盾を指摘した。さらに、王亨彦はこれらの矛盾を解決するために、事実を示し上記の記述を書いた。

元代の禅師である石屋清珙禅師（1272-1352）は、「送椿上人礼普陀」という詩を書いた。以下に示す。

> 寒潮日夜吼雷音、耳聴何如眼聴親。小白華巌観自在、頻伽声裏現全身。[28]
>
> 寒い海の波は昼にしても夜にしても雷のような音で吼えていた。
>
> 耳で聞くよりむしろ直接目で感じる方が良い。
>
> 小白華巌の観自在菩薩は
>
> 頻伽（美声の鳥）の声の裏（声に囲まれた状態）で全身の姿を現した。

この詩は海に面している普陀山の風景を描いたのである。石屋清珙禅師も「小白華山」の影響を受け、「小白華巌」という語を用いた。

---

[27]『中国仏寺史志彙刊』10、p.212a3- 4 。

[28]『新纂続蔵』70、p.673b11-12。

しかし、もし「普陀」が明代の万暦帝により用いられるようになったとしたら、なぜ「普陀」がそれ以前の元代の石屋清珙禅師（1272-1352）に使用されたのか。筆者が確認した結果、もう一つのバージョンである北京大学図書館蔵『石屋禅師山居詩』の目録と内容は、両方とも「送椿上人礼宝陀」という題目となっている[29]。つまり、北京大学図書館蔵の『石屋禅師山居詩』の「送椿上人礼宝陀」は、宋代の神宗が元豊 3 年（1080）に賜った「宝陀観音寺」の「宝陀」を用いた。

上記の王亨彦の注釈と合わせると、「送椿上人礼宝陀」が「送椿上人礼普陀」に直されたと考えることができる。したがって、筆者は「補陀」、「宝陀」、「普陀」から、時代を推測し、その年代を次のように示す。

補陀	唐代の『陀羅尼集経』などの経典
宝陀	元豊 3 年（1080）「宝陀観音寺」
普陀	万暦33年（1605）「護国永寿普陀禅寺」

以上より、「普陀」を用いた『西遊記』、『封神演義』、『南海観音全伝』は、特に万暦帝以降編纂されたことも推測できる。

3. 「海岸孤絶処」について

「海岸孤絶処」とは、文字通りの意味は「海岸が極まった処」であるが、中国では観音聖地を形容する言葉として知られている。

例えば、宗鑑集『釈門正統』と志磐撰『仏祖統紀』には「海岸孤絶処」という言葉が『華厳経』に現れると記されているが、『華厳経』には「海岸孤絶処」の文言を見出すことはできない。一方で、『華厳経』の異訳『羅摩伽経』には、「孤絶山」という表現が使われている。本論文では、「海岸孤絶処」の文言が現れるテキストを年代順に紹介し、分析する。

「海岸孤絶処」の初出は『天聖広灯録』である。『天聖広灯録』とは、北宋の皇女万寿長公主の婿である李遵勗（988-1038）が皇帝宋太宗趙炅の命を受け編纂した禅の公案や語録の集成である。『天聖広灯録』の「鼎州徳山志先禅師」

[29]『続修四庫全書』1324・集部・別集類、p.382、p.402、1995年、上海古籍出版社。

の項に、次の一節がある。

問、華蔵海中独游時如何　師云、海岸孤絶処、堂堂人不知。　学云、知後時如何。師云、方見本来身。[30]

問う、華蔵海中で一人泳ぐ時はどうか。　師が言う、海岸が極まった処、なんと人が知らない。　学（弟子）は言う、知った後はどうか。　師は言う、今まさに本来の姿を見るだろう。

つまり、華蔵海中を一人で泳ぎ、海岸が極まったところに行きついたら、本来の姿（自性）を見ることができるというのが、徳山志先禅師の立場である。

李遵勗編『天聖広灯録』の次に「海岸孤絶」の文言を用いたのは、黄庭堅（1045-1105）である。江西詩派の祖師である黄庭堅は、蘇軾（1037-1101）と並び「蘇黄」と称され、禅語録を典拠として詩を書くことでも知られている。黄庭堅は、観音菩薩を称賛して六首を集め、『観世音賛六首』を書いた。

『観世音賛六首』「其一」には、「海岸孤絶」の文言が使われている。次にそれらの詩を示す。

黄庭堅の『観世音賛六首』「其一」

海岸孤絶補陀巖、有一衆生円正覚。八万四千清浄眼、見塵勞中華蔵海。八万四千母陀臂、接引有情到彼岸。涅盤生死不二見、是則名為施無畏。八風吹播老病死、無一衆生得安隠。心華照了十方空、即見観世音慈眼。設欲真見観世音、金沙灘頭馬郎婦。[31]

海岸の孤絶している補陀巖に、正覚を円満した衆生（観音菩薩）がいる。八万四千の清浄な眼で、塵勞（俗世間、煩悩）中の華蔵海を見る。八万四千の母陀〔羅〕臂で、有情〔衆生〕を導き彼岸に至らしめる。涅盤と生死（輪廻）には二見（断見と常見）がないため、施無畏（菩薩が衆生の様々な畏怖を取り去り救う）と名付ける。八風（利、衰、毀、譽、称、譏、苦、楽）が吹き老いと病死を広めるので、安隠を得る衆生は一人もいない。心華が十方の空を照らすと、観世音の慈眼が見える。もし本当に観世音を見たい

[30]『新纂続蔵』78、p.540b19-21。

[31]『黄庭堅全集』第 2 巻、p.571、2001年、四川大学出版社。

なら、金沙灘頭の馬郎婦がそれだ[32]。

黄庭堅は、李遵勗編『天聖広灯録』「鼎州徳山志先禅師」の項の「華蔵海」と「海岸孤絶」を典拠としてこの詩を書いたと考えられる[33]。李遵勗編『天聖広灯録』「鼎州徳山志先禅師」の「海岸孤絶」の文章には、観音菩薩に関する記述は存在しない。そのため、黄庭堅が最初に「海岸孤絶」と観音菩薩を結び付けたものと考えられる。

『観世音賛六首』「其二」にも、「海岸孤絶」の文言が使われている。

黄庭堅の『観世音賛六首』「其二」

自心海岸孤絶処、戒定慧香補陀伽。観身実相[34]浄聖尊[35]、自度衆生大悲願。一一漚漚鏡本空、八万四千垂手処。夢時捉得水中月、親与彌猴観古鏡。[36]

〔観音菩薩の〕自心が海岸の孤絶している所、戒、定、慧（三学）が補陀伽に香る。自身の実相を観じ、聖尊を浄め、自ら衆生を済度することが大悲願である。一つ一つの水泡が本来の空を映し顕わしており、八万四千の法門に対して、無為に過ごす。夢を見ては水中の月をすくい取り、親しく彌猴と古鏡を観る[37]。

---

[32]「金沙灘頭馬郎婦」は禅書の『従容録』（T48、p.277c7）、『禅宗頌古聯珠通集』（『新纂続蔵』65、p.694b21-24）でも典拠として用いられている。

[33] 黄庭堅が李遵勗編『天聖広灯録』に基づいている例については、他にもある。例えば、上海博物館蔵「北宋 黄庭堅 行書華厳舒巻」の「雲□門抽顧頌 衲僧眼皮重 眼皮 七八量雷車打不動 打不動 抽顧頌 時念弥陀三五声 追薦東村李胡子生天西山裏 孟八郎强健 福田院里貧児叫喚 乞我一文大光銭」は、李遵勗編『天聖広灯録』「因僧問雲門抽顧頌。雲門抽顧。衲僧眼皮重。　眼皮重。七八量。雷車打不動。打不動。抽顧頌　時念彌陀三五聲　追薦東村李胡子　生西天山裏　孟八郎強健　福田院裏貧兒叫喚　　乞與我一文大光錢」（『新纂続蔵』78、pp. 527c22-528a3）に基づいている。

[34]「観身実相」は『維摩経』の「維摩詰言、如自観身実相、観仏亦然」（T14、pp.554c29-p.555a1）に由来する。

[35]『黄庭堅全集』の注では、「聖尊：四庫本『山谷集』巻一四作「聖果」」となっている（『黄庭堅全集』第 2 巻、p.571、2001年、四川大学出版社）。

[36]『黄庭堅全集』第 2 巻、p.571。

[37]「親与彌猴観古鏡」は『景徳伝灯録』の「人人尽有一面古鏡、遮箇彌猴亦有一面古鏡」（T51、p.295a8- 9 ）に基づく。

黄庭堅の「自心海岸孤絶処」という詩句の内容は、前述した李遵勗編『天聖広灯録』に収録されている「問、華蔵海中独游時如何　師云、海岸孤絶処、堂堂人不知。　学云、知後時如何。　師云、方見本来身。[38]」と共通しており、いずれも「海岸孤絶処」を用い、本来の姿（自性）の重要性を強調している。また、黄庭堅は、観音菩薩の特徴である「大悲」を強調し、普陀山（補陀伽）と「海岸孤絶処」を結び付け、この詩を作った。

「海岸孤絶処」は、李遵勗編『天聖広灯録』の「鼎州徳山志先禅師」という禅語録の中で最初に用いられ、元来は観音菩薩とは関係のない言葉であった。黄庭堅の『観世音賛六首』が李遵勗編『天聖広灯録』に基づき、「海岸孤絶処」と観音菩薩の居所を結び付けて詩を書いたことが、「海岸孤絶処」が観音菩薩の聖地を形容する言葉となる契機となった。宋代以降「海岸孤絶処」が観音菩薩の聖地を形容する言葉として流行したのは、黄庭堅の影響によるものと考えられる。黄庭堅の影響力は強く、「海岸孤絶処」と観音菩薩の居所の結び付きは、一般的な認識となっていった。北宋の睦庵善卿が編纂した字典である『祖庭事苑』[39]、宗鑑集『釈門正統』、宋代の志磐撰『仏祖統紀』[40]が、観音菩薩の居所は「南海岸孤絶処」の「補恒落迦」であると『華厳経』に書かれていると述べたのは、そのためであると考えられる。また、中国普陀山の寺誌である盛熙明『補陀洛迦山伝』と周応賓『重修普陀山志』にも観音菩薩の居所が「海岸孤絶処」と結び付けられた記述が見られる。

南宋の宗鑑集『釈門正統』と志磐撰『仏祖統紀』は、「海岸孤絶」が『華厳経』に見られると述べている。しかし、筆者が「聖語蔵」や「磧砂蔵」、そして敦煌写本などを確認したところ、『六十華厳』、『八十華厳』、『四十華厳』には「海岸孤絶」を見出すことはできなかった。

一方、「孤絶」の語は「入法界品」の異訳である『羅摩伽経』の「善男子。於此南方有孤絶山、名金剛輪荘厳高顕。彼有菩薩名観世音、住其山頂。（善男子よ。ここから南方へ、孤絶している山があり、「金剛輪荘厳高顕」と名付ける。そこには観世音という名の菩薩がおり、その山頂に住んでいる。）」[41]に見えて

[38]『新纂続蔵』78、p.540b19-21。

[39]『新纂続蔵』64、pp.353c23-a1。

[40] T49、p.388b22-29。

[41] T10、p.859c9-11。

おり、また「善財童子…（中略）…漸漸遊行、到彼孤山、歩歩登陟、念観世音、正念不捨。遥見経行在巌西阿。（善財童子…（中略）…少しずつ進んで行脚し、彼の孤山に至り、一歩一歩登り、観世音を念じ、正念してやめない。遠くから観音菩薩が山の西側で経行しているのが見える。）」[42]という「孤絶」に類似した表現も見られる。しかし、『羅摩伽経』における観音菩薩の居所に関する記述には、「海岸」や「海」などの語は見られない。

『観世音菩薩往生浄土本縁経』にも「海岸孤絶」の語が見られる。しかし、『観世音菩薩往生浄土本縁経』は中国の僧伝や経録には現れず[43]、恋田［2008］[44]や箕浦［2009］[45]のように、『観世音菩薩往生浄土本縁経』は日本で作られた偽経であると述べる研究者もいる。

上記の黄庭堅は、「海岸孤絶補陀巌」、「自心海岸孤絶処、戒定慧香補陀伽」などの詩句において、「海岸孤絶」を用いたが、観音菩薩の居所は「補陀」を使った。その後、曹洞宗の真歇清了禅師の補陀山にある庵では「海岸孤絶禅林」[46]（或いは「海岸孤絶処」[47]）という扁額にも用いた。それから、懶翁は中国の普陀山

---

[42] T10、p.859下。

[43] 日本の真仏『経釈文聞書』「親鸞夢記」には、『観世音菩薩往生浄土本縁経』の「若有重業障、無生浄土因。乗弥陀願力、必生安楽国」（『新纂続蔵』 1 、p.363c3- 4 ）が引用されている。日本の義観（生没年不詳。奥書に「宝永二年」の記述があるので、1700年代に活躍したと考えられる）『本朝諸宗要集』にも、『観世音菩薩往生浄土本縁経』の経文が引用され、「『浄土本縁経』云、一念弥陀仏、即滅無量罪矣」（『大蔵経補編』32、p.487c20-21）と述べられている。日本の真仏『経釈文聞書』「親鸞夢記」には、『観世音菩薩往生浄土本縁経』の「若有重業障、無生浄土因。乗弥陀願力、必生安楽国」（『新纂続蔵』 1 、p.363c3- 4 ）が引用されている。日本の義観（生没年不詳。奥書に「宝永二年」の記述があるので、1700年代に活躍したと考えられる）『本朝諸宗要集』にも、『観世音菩薩往生浄土本縁経』の経文が引用され、「『浄土本縁経』云、一念弥陀仏、即滅無量罪矣」（『大蔵経補編』32、p.487c20-21）と述べられている。

[44] 恋田知子［2008］、p.309。

[45] 箕浦尚美［2009］「新出孝養説話集の研究」https://xn--kaken-938i.nii.ac.jp/ja/file/KAKENHI-PROJECT-19720051/19720051seika.pdf（2021年 5 月25日現在）

[46] T51、p.1137c23-25。

[47] 『中国仏寺史志彙刊』9 、pp. 103a08-104a4。

に遊歴したことも『東国僧尼録』に記されている[48]。懶翁と「海岸孤絶処」については、韓国の海東龍宮寺の公式サイト「海東龍宮寺創建史」という頁に記されている。次に示す。

據説、無限慈悲的化身観世音菩薩居住在海岸孤絶処並乗龍顕霊、因此韓国的観音信仰大多形成於海辺或島嶼。韓国三大観音聖地、「襄陽洛山寺、南海菩提庵、海東龍宮寺」之一的龍宮寺、將大海、龍以及観世音菩薩絶妙地融合在一起、因此比其他地方更霊験。位於東海最南端的龍宮寺、於1376年由恭滑王時期的王師懶翁大師所建。[49]

無限慈悲の化身である観世音菩薩が「海岸孤絶処」に住んでおり、龍に乗って現れて霊験を示すと言われているため、韓国の観音信仰はほとんど海辺や島で形成されている。韓国の三大観音聖地、「襄陽の洛山寺、南海の菩提庵、海東の龍宮寺」の一つである龍宮寺は、大海、龍及び観世音菩薩がうまく融合しているため、他のところより霊験がある。東海のもっとも南端に位置する龍宮寺は、1376年に恭滑王時期の王師である懶翁大師によって建てられた。

以上のように、海東龍宮寺は1376年に懶翁恵勤（1320-1376、以下「懶翁」と称す）によって建てられ、観音菩薩が「海岸孤絶処」に住んでいることが明記されている。しかし、黄庭堅の詩と曹洞宗の真歇清了禅師に関する記述では、観音菩薩の居所が「補陀」であることが記されており、観音菩薩の居所が「海岸孤絶」であることは述べられていない。一方、韓国の海東龍宮寺は、観音菩薩の居所がPotalakaや「補陀」、「普陀」などを述べずに、「海岸孤絶処」に住んでいることを明記している。このことから、「海岸孤絶処」が観音菩薩の居所であることが、韓国の海東龍宮寺でも重視されていることが分かった。「海岸孤絶処」は観音菩薩の居所を形容する言葉から観音菩薩の居所になった。

---

[48]『東国僧尼録』の「惠勤　懶翁　諡禅覚道号普済尊者」の項では、「辛卯春、抵宝陀洛迦山、拜観音」と述べられている（『新纂続蔵』88、p.646c13）。また、李能和『朝鮮仏教通史』の「懶翁和尚行狀」の項でも、「師礼辞、詣明州補陀洛迦山、親見観音」と述べられている（『大蔵経補編』31、p.520a7- 8 ）。

[49] http://www.yongkungsa.or.kr/chn/01/01.php（2021年 5 月25日現在）筆者が引用したのは、中国語繁体字版である。

結論

Potalakaの翻訳（「補陀」、「宝陀」、「普陀」など）の変遷については、本論文では「補陀」、「宝陀」、「普陀」の翻訳が時代を推測できることを明らかにした。さらに、「普陀」という翻訳は単にPotalakaの翻訳にもかかわらず、明の万暦帝の観音菩薩観に由来し名付けられたことを解明した。

観音菩薩と「海岸孤絶処」に関しては、『六十華厳』、『八十華厳』、『四十華厳』には、「孤絶処」の語が見られない。しかし、近い表現として、「孤絶」という語が「入法界品」の異訳である『羅摩伽経』の「善男子。於此南方有孤絶山、名金剛輪荘厳高顕、彼有菩薩名観世音、住其山頂」という記述に見られる。ただし、『羅摩伽経』における観音菩薩の居所に関する描写には、海などの記述は見られない。

黄庭堅は『天聖広灯録』に基づいて『観世音賛六首』などの詩を書いた。『天聖広灯録』の「海岸孤絶処」は、もともと観音菩薩とは関係がない。黄庭堅の影響で、「海岸孤絶処」の句が観音菩薩の居所の典拠となり、宋代以降流行していくこととなった。現在の中国普陀山にも「海岸孤絶処」と刻まれている石碑があることは一例である。

先行研究では、「海岸孤絶処」に触れる場合、真歇清了が題した扁額を挙げるのが通例であった。しかし、「海岸孤絶処」の初出が『天聖広灯録』であることや、黄庭堅が「海岸孤絶処」と「観音菩薩」を結び付けたことについては、研究されていなかった。黄庭堅が「海岸孤絶処」と「観音菩薩」を結び付けたことが、「海岸孤絶処」が観音聖地の象徴となった直接的な要因であると考えられる。

元来、『華厳経』では、観音菩薩の居所が海岸孤絶処であることが記されていない。しかし、普陀山に遊歴した懶翁が建てた韓国の海東龍宮寺は、ホームページで観音菩薩の居所がPotalakaや補陀または普陀を述べずに、観音菩薩は「海岸孤絶処」に住んでいると記している。上記を考察した結果、「海岸孤絶処」は、黄庭堅が観音菩薩の居所を形容する言葉を用いたことから観音菩薩の居所になったことを明らかにした。

〈キーワード〉観音、普陀、宝陀、海岸孤絶処、黄庭堅

＜略語＞

T：『大正新脩大蔵経』（高楠順次郎編、全100巻、大正一切経刊行会、1924-1932）。

『新纂続蔵』：『新纂大日本続蔵経』（全90巻、国書刊行会、1975-1989）。

＜参考文献＞

『黄庭堅全集』、2001年、四川大学出版社。

『続修四庫全書』、1995年、上海古籍出版社。

杜潔祥等編『中国仏寺史志彙刊』、1980年、明文書局。

P. L. Vaidya, ed. 1960. *Gaṇḍavyūhasūtra*, Buddhist Sanskrit Texts, No.5, Darbhanga.

Sangs rgyas phal po che shes bya ba shin tu rgyas pa chen po'i mdo, P No.761, 38. *byang chub sems dpa'gnas.* P No.761, 45. *Sdong po bkod pa'i mdo pa.*

小林太市郎［1974］『唐代芸術の研究』、淡交社。

恋田　知子［2008］「江戸初期における絵巻制作の一背景―中井正知・杉原盛安の文化活動」、『藝文研究』。

長谷岡一也［2020］『華厳経入法界品梵蔵漢対照索引』、法蔵館。

彦坂　　周［1989］「南印ポディヤ山、観音信仰発祥の聖地」、『日本印度学仏教学』38（1）。

箕浦　尚美［2009］「新出孝養説話集の研究」。

Marcus Bingenheimer, 2016. *Island of Guanyin: Mount Putuo and Its Gazetteers* , Oxford Scholarship Online.